

瀬部の熊澤十左衛門とは（１）

熊澤 良嗣

県道 64 号（一宮犬山線）から瀬部小学校へ向かう道路の左側に、朱塗りの小さな社と大きな石碑が立っている塚がある。社には名札がないが、石碑の表面には「熊澤十左衛門次包先生之碑、文學博士建中辨匡書」の文字があり、裏には「辞世 次包、我ひとりたどるよみ路は程遠し ゆくてをてらせやまのはの月、明治二十六年正月廿三日歿、昭和五年三月建之 筆子有志一同」の文句が刻まれている。また碑の左手前には「山神」の石碑があって、裏面には文政十二^{うし}丑正月吉日（1829）の文字が見える。

熊澤十左衛門がどういう人物なのか誰に聞いても分からない。この碑は尾関という方の家の庭先にあるのだが、尾関さんに聞いても、昔からあったということ以外は何も知らないという。

『一宮市史』などで調べているうちに、いろいろなことが分かってきた。

熊澤十左衛門は安政二年（1855）から明治五年（1872）まで寺子屋を開いていた武士で、そのことは『愛知県教育史別冊・愛知県寺子屋一覧』にも出ている。十左衛門の分家と思われる家から出て来た記録によると、「十左衛門」は瀬部熊澤宗家^{そうけ}の代々当主の通称であって、幕末から明治半ばの当主の名が「十左衛門次包」だったということになる。

天保 12 年の瀬部村絵図にも「十左衛門」の名は見られ、「熊澤十左衛門御除地 四反壱畝拾歩」と記されている。その位置は瀬部小学校辺りに相当し、一帯は十左衛門が所有する広大な朱印地であったようだ。そこにあった屋敷で十左衛門は寺子屋を開き、読み書きを教えていたことも分かった。だからこの塚は教え子（筆子^{ふでこ}）たちが昭和 5 年になって建てた筆子塚なのである。塚の周辺は、昭和初期には竹林があったと年長者はいう。

揮毫者の^{けんちゆうべんきやう}建中辨匡は、名古屋市東区にある徳川家の菩提寺建中寺の住職だった椎尾辨匡のことと思われる。椎尾は東京帝大で哲学を学び、日大や早稲田大などで宗教を講じ、大正大学長も務めた。また生地である名古屋では旧制東海中学（建中寺で開校）の校長や同学園理事長を務め、いまの東海学園の基礎を築いた。衆議院議員も三期務め、戦後は空襲で焼失した東京芝増上寺の^{ほっす}法主として再興にあたった。その辨匡がどういう縁で十左衛門碑に揮毫をしたのかは今後の課題である。ご存知の方はぜひお知らせください。

朱色の社前では毎年10月の^{あげ}上祭りに巫女舞いと神主の^{のりと}祝詞奏上がおこなわれる。名前の分からない社前でおこなっているので以前から気懸かりであった。

そこで、先日尾関さんをお願いをして内部を拝見させていただいた。祭神名を知る手がかりが何か入っていないか確認するためである。すると大量の埃をかぶった棟札と仏像が出て来た。十数枚あった棟札には「八幡」の文字があり、八幡宮（八幡社）であることが判明した。また、最も古い日付の棟札には、「寛文五年^{きのとみ}乙巳三月」「奉建立八幡大菩薩武運長久」「願主熊沢拾左衛門」の字が墨書されていた。他の札にも「重左江門」「十左衛門次興」「十左衛門次包」などと記されていた。このことからジウザエモンの漢字表記はいろいろであったように思われる。

